

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載いたします。

陸上でも水上でもスタートは大切だ。短距離になればなるほど、特にスタートは微妙である。何時間もかけて走るマラソンならば多少趣は異なるが、スタートで遅れをとると、もう勝てない。

吉岡隆徳（一九〇九〜八四）といえば短距離において世界的に有名な選手で、特にスタートダッシュは天下一品だった。足をハの字型にしてまず三歩飛び出す。つま先が内側を向いた形で右、左、右と出る。スピードスケートのスタートの形に似ている。体も稲妻型に振られ、低い体勢には加速がつきやすい。何年もかかって編み出したこの「ハの字型三歩説」による「暁の超特急」というそのニックネームは、アメリカのトラン選手の「深夜の超特急」とともに、当時人口に膾炙した。

さて一般的に、正月はその年のスタートなどと言われている。また、朝は一日のスタートとも言われる。吉岡選手でなくても、スタートがまずいと、その年、その日は遅れをとったり、うまくいかなかったりする。では、どうしたらスタートがうまくできるのか。

よく考えてみると、人間は時間の中に生きている。一日のスタートは朝にあるというが、一時間ごとに区切ってみると、たとえば九時のスタート、十三時のスタートというようになるのであり、さらに三十分ごと、十分ごと、



何事も最初が肝心

丸山竹秋

いや一分ごと、そして一秒ごとにスタートがあるということになる。これをきりつめると、いつもスタートだということになる。

スタートはまずかったが、後はうまくいったというような場合はいろいろとあるもの。しかし、その「後はうまくいった」というのは、スタートなんかどうでもよい、という姿勢からは絶対に生まれない。

人間だから、スタートでつまづくことはある。最初は失敗だった、ということはいくつもある。しかし、次第に気を立て直して、そのつまづきから教訓を学びとり、これをプラスに転じて、最後は成功したという例は、これまたいくつもあるのである。

こうした場合、なぜ成功したかといえば、つまづきや失敗を活かすという心構えがあったからで、そうした心構えは、やはり不断の研鑽から生ずるものである。研鑽と言うと、大げさで堅苦しいが、日常の生活の中からそうした実践を抜きにして、だらけきっていると、つまずいたらそれつきり、失敗しても立ち直ることができないようになってしまう。

私たちは、厳しい練習鍛錬には耐えられないだろうし、またその必要もないかもしれない。しかしすべての人は、他の人になんか独特の個性を持っているのであり、その意味では世界的な存在である。つまり、唯一無二のあなた自身であり、私自身なのである。ただ名前が知られていないだけだ。

今がスタートだ、という気持ちで、現在の仕事にまごころを尽くす。これが生き生きとした人生なのだ。

『繁栄の法則』より